二分法的思考が損失回避傾向に及ぼす影響

—二重プロセス理論の観点から—

○三枝高大¹・小塩真司²

(¹早稲田大学大学院文学研究科・²早稲田大学文学学術院)

キーワード：二分法的思考, 二重プロセス理論, 損失回避

Effects of dichotomous thinking on risk aversion

Takahiro MIEDA¹ and Atsushi OSHIO²

(¹Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda Univ., ²Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda Univ.)

Key Words: dichotomous thinking, dual-process theory, risk aversion

目 的

二分法的思考とは、「白か黒か」、「0 か 100 か」といった二律背反で物事を捉える思考スタイルである。この二分法的思考の下位側面に物事を二分法的に捉えることを好む「二分法の選好」、世の中の事象や物事は2つに分けられると捉える「二分法的信念」、物事を二分法的に分け、さらにそれらが損か得かといったことを重視する「損得思考」の3種が見出されている(Oshio,2009)。こうした二分法的思考は、日常的に用いられ、複雑な物事への判断の簡便さに寄与していると考えられる一方で、リスクに関わる判断において二分法的に判断を行うことは、不適切である可能性がある。また、意思決定に関連する二重プロセス理論がある(Stanovich, 2011)。この二重プロセス理論では、思考は自動的で素早い判断を行うシステム1、遅く分析的な思考を行うシステム2の2つのプロセスからなると考えられている。

そこで、二分法的思考を行う者が損得に関わる判断を行う際に、損失回避を重視するの否か手元に残る金額を重視するの否かなど、どのような基準で判断を行うのか、その判断が自動的であるのか、あるいは分析的に思考した末に行われるのかを検討する。

この二分法的思考と損失回避傾向との関係を検討するため、金銭の獲得・損失に関するフレーミング課題(Tversky & Kahneman,1986)を使用する。本課題において、回答に要する時間を分析的・意識的思考が行われたかの指標、選んだ回答を損失回避の指標として用いる。また、得られる金額に着目した回答を行うのかを確認する。これらによって、二分法的思考がリスク回避傾向に及ぼす影響を二重プロセス理論の観点から検討する。

方 法

調査対象者 大学生・大学院生 32名(男性9名,女性23名),平均年齢21.8($SD=1.80$)歳であった。

調査内容 二分法的思考:二分法的思考尺度(Oshio,2009)を使用した。「二分法の選好」、「二分法的信念」、「損得思考」の3つの下位尺度で構成される。6件法。

実験課題 フレーミング課題:Tversky & Kahneman,(1986)の一部表現を変更した2問。回答時間を計測し、システム2の分析的思考の生起の指標とした。また、各問において選んだ回答を、各問間の得られる金額の一致/不一致、損失回避の指標とした。

結 果

二分法的思考各下位尺度とフレーミング課題の各指標の相関係数を算出した(Table 1)。

回答時間では、二分法の選好($r=.31, p<.10$)、損得思考($r=.41, p<.05$)と正の相関を示した。二分法的信念とは負の相関($r=-.31, p<.10$)を示した。損失回避傾向とは、二分法的信念のみ正の相関($r=.34, p<.10$)を示した。得られる金額の一致/不一致

では、二分法の選好($r=.32, p<.10$)、損得思考($r=.37, p<.05$)と負の相関を示した。また、回答時間と金額の一致($r=-.36, p<.05$)に負の相関を示した。

Table 1 二分法的思考尺度と損失回避課題との相関

	二分法的思考尺度			
	全体	二分法の選好	二分法的信念	損得思考
回答時間	.20	.31 [†]	-.31 [†]	.41 [*]
損失回避	.22	.08	.34 [†]	.13
一致傾向	-.38 [*]	-.32 [†]	-.20	-.37 [*]

† $p<.10$, * $p<.05$

考 察

二分法の選好と損得思考が高いほど、回答時間が増加していた。これは、システム2の分析的思考が生じているものと考えられる。また、二分法の選好と損得思考が高いほど手元に残る金額の不一致傾向が高くなっており、分析的思考においてははじめに行った回答方針を重視した回答を行っている可能性がある。二分法的信念が高いほど、回答時間の減少が見られ、また、損失回避を行うことが示唆された。これはシステム1の直感的印象のみによって損失回避の回答を行っている可能性がある。

二分法的思考は他者軽視や自己愛のような自他への不適切な評価といった要素との関連が示唆されている(Oshio, 2009)。二分法的信念の直感的な判断傾向、二分法の選好・損得思考の分析的に思考した上ではじめの回答で行った回答方針を重視した回答を行う傾向は、自他に対する態度においても、自身を優位におく評価を熟慮せずに行い、分析的思考によりその評価を強めている可能性がある。また、二分法の選好と二分法的信念は不合理な信念を有し、不適応な行動を行うパーソナリティ障害との関連(Oshio, 2012)が示唆されており、上述のプロセスにより二分法的思考が不適応傾向に影響を与えている可能性があり、今後、検討を行う必要がある。

引用文献

- Oshio, A. (2009). Development and validation of the dichotomous thinking inventory. *Social Behavior and Personality: an international journal*, 37(6), 729-741.
- Oshio, A. (2012). An all - or - nothing thinking turns into darkness: Relations between dichotomous thinking and personality disorders. *Japanese Psychological Research*, 54(4), 424-429.
- Stanovich, K. (2011). *Rationality and the reflective mind*. Oxford University Press.
- Tversky, A., & Kahneman, D. (1986). Rational choice and the framing of decisions. *Journal of business*, S251-S278.